

2002年(平成14)3月1日(金)

発行 中央大学学生会「白門50会」支部
 編集 広報部会 外村幸雄(法・政治) 山下史雄(法・政治)
 投稿/連絡 〒264-0006 千葉県若葉区小倉台2-2-6 山下史雄
 03-3740-2588(職場)
 E-mail: fum@mtc.biglobe.ne.jp
 投稿は電子メールか封書で。電子メールの写真はJPEGでお願いします。

白門50会

会報



選手と一体 熱い声援

箱根駅伝応援記 政金 驍(経・国際)

白門50会と大学駅伝

2002年1月2日、大学駅伝の応援を白門50会で初めて正式に行った。当日は応援集合地を小田急線風祭駅と決めて三々五々集まる。何故5区の中継地が選ばれたかと言うと、50会の有志で昨年と同じところで応援をしたのである。現50会副会長の吉田さんを中心に、7名が同じところに集まり応援に声を張り上げた。その時は全員が中大陸上部の真紅のグラウンドコートに身を固めたのであるが、なぜか小生一人恥ずかしがっていたのを覚えている。5区の中継地はかまぼこの鈴廣の駐車場である。箱根の山の上りのスタート地点で、昨年は中大の藤原の活躍で往路優勝、レース後の我々も祝勝会で大いに盛り上がった。大学駅伝の面白さは、自分が走っている選手と同じ大学の出身というだけで、あたかも自分が走っているかの如く感じる所にあるのかも知れない。風祭の駅から鈴廣の前へと人ごみの中を50会の旗を持って歩く。各大学の旗があちこちに見える。各大学のそれらしき人も大勢集まっている。否が応でも気分が高まってくる。これが又良いんだな。白門50会の旗を持って立っているといろんな人から声を掛けられる。

昨年は年配のご夫婦で、中大の卒業生と言う事で最後までずっと一緒に応援をして楽しんだ。今年は岡山県から毎年応援に来ていたと言う、矢張り中大の卒業生。これが終わらないと落ち着かないとは、駅伝中毒か?相当の入れ込みでインターネットからプリントアウトした中大の選手のオーダー表を手をしている。往路の変更はないかと尋ねられるが当方もそこまでは確認していない。確かな情報入手が必要であると痛感した。応援は中央大学の歌「白門に栄光あれ」のCDをボリュームいっぱいあげ、選手を叱咤激励したのであるが、残念ながら昨年のように往路優勝とはいかなかった。戦いの後は杉本副幹事長の手配により千世楼で新年会をやった。この時期この場所はなかなか使えない場所である。さすが杉本さんと一同感謝する。20名ほどの部屋に半分ぐらいの人数でいささか寂しく思うと同時にお店の人に申し訳なく思った。酒が入ると勝敗の結果には関係なく大いに盛り上がる。年をとったせいか昔の話が懐かしく感じる。

授業にも出ないで力を入れたマージャンのこと、今ではその力も無くなったのか、女子大生のお尻を追い掛け回した話。

創刊に当たって

白門50会会長 小泉 努(経・経済)

新年のご挨拶

明けましておめでとうございます。会員の皆様よき新春をお迎えのことと思います。昨年21世紀を迎えて今年は、その2年目、新世紀の姿が少しずつですが、見えてきたと思います。残念なことです。今世紀は、大変厳しい世紀だと思えます。年金制度の事実上の破綻、「金融」の機能不全、「政治」の機能不全、失業率の悪化、少子高齢化、犯罪の凶悪化による治安の悪化、株安円安債券安等々の現象が露わになってきました。

今まで構造改革を先送りし、国債を垂れ流し続けた「ツケ」がいよいよ噴出した感じです。これから10数年は、この「ツケ」の精算が迫られるでしょう。その後は、日本の復活が少しは、見込めるとは思いますが、本格的なそれは、今世紀末を待たないと無理かもしれません。

さて、昨年6月に、会員の皆様のご協力を戴き、「白門50会」を創立させていただきました。今年1月2日には、会員有志で、現地に出向き、箱根駅伝の往路応援を行いました。

4月13日(土)には、お花見を兼ねて創立後はじめての、「白門50会」支部総会を多摩校舎にて行います。会員の皆様、多摩校舎に行ってお花見をし、同期生と語り合ってくださいよう切に御願ひ申し上げます。

皆夢中になって話し込んでいた。来年もまた50会の旗の下での応援を誓い、酔いの覚めやらぬうち帰途につくことになった。帰りの電車の中、我が女房殿にバツリあったのは又何とした事か?(写真提供・吉田光弘)

この感動を一人でも多く

小口隆三(経・国際)

観衆の箱根

駅伝への関心の深さ、熱気と盛り上がり肌で感じながら白門50会の幟を立て、待機。大手町をスタートしてから2区、3区1月2日午前10時過ぎ、小田原中継所の最寄り駅である風祭駅に集合。昨年と同様のスケジュールだが、前回は気恥ずかしかったおろしたての中大のネーム入りの真っ赤なベンチコートも互いに見慣れ、馴染んで見えるのは応援2年目のせい。4区の小田原中継所に到着して、各大学のOB、一般の情報をラジオで聞き、一喜一憂しながら興奮の渦が徐々に近づいてくるのを実感した。湧き上がってきた観衆の声援が一段と大きくなり、先ず1位の駒沢の姿が目飛び込んできた。続いて2位の早稲田、3位の地元の神大と続々と各大学の選手が襷を繋いでいく。

そして、いよいよ我が中央大学の姿が見えてきた時、観衆の眼が、一斉に我々中大OBに向けられたのが印象的だった。我が中大は中継所を9位で通過、5区を担う山登りのエースと前評判の高い藤原選手に期待を寄せ、熱い声援で送り出した後、残る6校全てにエールを送り見届けた。選手、関係者、OB共々丸となって一つの目的を目指す連帯感により、改めて母校愛が深まり、この感動を一人でも多くのOBに味わってほしいと実感した。